

台湾におけるマンガアーカイブの現状 —台北市立図書館中崙分館と国家図書館の事例から—

山中 千恵*

要約

本稿は、マンガアーカイブの意義を考えるための基礎研究の一つとして、台湾におけるマンガ文化とアーカイブの現状を事例報告するものである。

台湾のマンガの歴史は検閲と日本マンガの翻訳出版とともにあった。マンガは長い間、子どものもの、文化として語るに足るものではないとみなされてきたが、近年、台湾でも図書館にマンガが収蔵されるなど、文化的位相に変化がみられる。

1966年～1987年に國立編譯館に納本されたマンガ本を収蔵する台北市立図書館中崙分館と、現在出版社から納本をうける国家図書館芸術および視聴覚資料センターには、マンガのアーカイブが存在している。しかしそこでは、「サービス」として本を集める台北市立図書館に古い資料が収蔵され、アーカイブを旨とする機関には、現在出版されている書籍が集まるというねじれ現象が生じている。また、現在出版されているマンガの多くは日本マンガの翻訳版であることから、台湾の施設は、マンガを生産したのが誰かという観点からマンガの価値を確定するのではなく、だれがマンガを読むのか、という観点からその意味を見出すことをせまられている。

キーワード：台湾，マンガ，アーカイブ，図書館，ミュージアム

はじめに

近年、日本では地方自治体を中心となったマンガ関連文化施設（マンガ博物館や美術館，図書館，記念館など）の設立が相次いでいる。こうした施設は、マンガ本や原画，作家にゆかりのモノを集めており、国内に

一定のアーカイブが形成されつつあるといえる。しかし各施設に、アーカイブを何のために維持するのかという明確な理論があると言い切れないのが現状であろう。マンガは商業的成功と切り離せない文化であるため、経済効果を期待してマンガ関連文化施設の設立が企画される場合も多く、「人気」のみをその根拠や基準としてしまいがちである¹⁾。これは、アーカイブに意義を与えるためのマンガ研究が十分に成熟していないこととも関連するであろう。

ではいま、いかなるマンガ研究と、アーカイブの思想が必要とされているのか。そもそも、人々の日常文化としてのマンガ文化にとって、アーカイブはいかなる意味をもちうるのか。本稿では、こうしたアーカイブの意義を考えるための基礎研究の一つとして、台湾におけるマンガ文化とマンガアーカイブの現状を事例報告する。

1. 台湾におけるマンガ文化

台湾のマンガ研究をおこなっている李衣雲によると、台湾におけるマンガ、とくにストーリーマンガの萌芽は、1950年代ごろに登場する児童向け雑誌にみられるという。これらの雑誌には、台湾人作家によるものだけではなく、日本マンガの翻訳版も掲載された。しかし、第二次世界大戦後から、マンガは政治的イデオロギーの観点から審査されるべき対象とみなされてきた。「脱日本化」も観点の一つであったため、当時こうした雑誌に掲載された日本マンガは、日本の痕跡を消去、改変されていたという(李, 2007)。

政治的イデオロギーからマンガの是非を問う視点は、台湾のマンガ文化に非常に大きな影響を与えることとなった「漫画審査制」に結実する。1962年に国民党政

* 仁愛大学人間学部 コミュニケーション学科 准教授

1) これらの点に関しては、山中 2013, 山中他 2013 等を参照。

府によって公布された「編印連環漫画輔導辦法」を通称「漫画審査制」と呼ぶのだが、これは1969年から厳格に適用されていく。審査制の導入により、1960年代には4000冊ほどのマンガが検閲機関である国立編譯館に提出されていたが、1970年には200冊程度へと減少した。特にこの時期、台湾人作家の急激な減少が生じている。(李, 2007)。

作家の減少を補うために、出版社は日本マンガ翻訳版の出版に力をいれるようになった。台湾人作家が新たに創作するよりは出版が容易で、量でまざる日本マンガ翻訳版は、検閲を数多く通過する結果となった(李, 2007)。こうした経緯から、台湾では日本マンガの翻訳版が大量に出版されるマンガ市場が形成されていたのである。

1960年代ごろから週刊マンガ雑誌の相次ぐ創刊により、雑誌やマンガ単行本を購入するマンガの読み方が主流を占めるようになった日本とは異なり、台湾では、長く貸本屋が重要なマンガ文化の拠点となってきた。出版されたマンガの多くは、書店などでは販売されず、貸本屋で読むか光華商場などの古本市場や街角の新聞スタンドなどの露店で購入するしかなかった。

1987年に戒厳令が解除されると、翌年漫画審査制も廃止された。これによって、台湾人の新世代マンガ家が誕生しはじめる。また、『週刊少年ジャンプ』(集英社、日本)をはじめとする日本の人気少年マンガ週刊雑誌の人気作品をよせあつめて作った『少年快報』(東立出版、台湾)が出版されるなどし、毎号20万部規模の出版部数を記録したという(李, 2007)。

しかし、ここまで出版されてきた日本マンガの翻訳版は、正式な著作権契約を結んだものではなかった。1992年に著作権法が改正されると、すでに日本マンガを出版していた大手マンガ出版社は、合法化をめざして動き始めた。1990年代以降、正式な著作権契約に基づき日本マンガが出版されると、大型書店でもマンガが販売されるようになっていく。李衣雲は、こうした合法化と書店販売を可能とする出版市場の形成によって、マンガが一定の文化として人々に認識されるようになったと分析している(李, 2007)。

現在の台湾マンガ市場では、いまだ日本マンガの翻訳版が圧倒的占有率を誇る。しかしその一方で、マンガ出版社は、台湾のマンガ作家育成をめざし、新人賞を設立するなどの取り組みを続けている。また、同人誌活動も盛んであり、アマチュアの活動から新しい作家が誕生するようにもなっている。台湾での活動にとどまらず、日本のマンガ雑誌に作品を発表したり、ゲーム商品などヘイラストを提供する作家も登場している。

以上のように、台湾におけるマンガ市場は、日本マンガの翻訳出版と一体となりながら、検閲の歴史を潜り抜けて形成されてきたものであるといえる。さらに、2000年代にはいると、政府の新聞局がマンガの奨励賞を設けるようになり、あくまでもサブカルチャーの一種とされ、文化的にはむしろ評価されてこなかったマンガへの認識が変化しはじめてもいる。近年、国立、公立の図書館にマンガが収蔵されるようになり、その認識の変化は加速しているといえるであろう。

そこで、本論では、こうしたマンガ認識の変化の一端を担った図書館である、「台北市立図書館中崙分館(Taipei Public Library Zhonglun Branch)」と「国家図書館芸術および視聴覚資料センター(National Central Library's Arts and Audiovisual Center (NCLAAC))」²⁾をとりあげ、館がもつマンガ認識と、アーカイブの状況についてみていきたい。台湾にマンガを収蔵する図書館はほかにもいくつかあるが、アーカイブの規模においてこの二館を選択した。以下図書館の状況に関する解説は、報道資料及び2013年3月15日、16日におこなった各館担当者へのインタビューに基づく³⁾。

2. 台北市立図書館中崙分館のアーカイブとその目的

台北市立図書館中崙分館がマンガ図書館となったのは、1998年に市民からの要望による。市立図書館はいくつかの館に特色を持たせて分館を設立しているが、マンガ図書館を希望する市民の声が、建設中の中崙分館の特性を決定したのだった。

台北市松山區長安東路、台北市内中心部に位置するこの図書館は、雑居ビルの7階から10階までのフロアを占める。7階(図書館地下1階)は新聞雑誌、8階(図

2) 英語名から混乱されることがあるが、旧国立中央図書館台湾分館(現国立台湾図書館 National Taiwan Library)とは異なる施設である。

3) インタビューは、2013年3月15日 台北市立図書館中崙分館主任の曾湘惠氏、3月16日に国家図書館芸術および視聴覚資料センター担当者嚴文英氏に対し、それぞれの館事務室におこなった。



図1. 台北市立図書館中崙分館はビルの一部にある

書館1階)は児童書籍および子ども向けマンガ、9階(図書館2階)が一般マンガ、10階(図書館3階)が一般書籍という構成である。

図書館に入ってすぐのフロア(図書館1階)には子どもがごろごろ寝転がって本を読めるようなキッズスペースがそなえられており、また他のマンガ収蔵階にもソファが多めに配置されている。これは、図書館3階の一般書籍エリアにテーブルと固い椅子が配置され、書架が機能的に並ぶのとは異なっている。マンガ階は書架の間隔もゆったりしており、いまはまだその棚に余裕もある。18歳未満閲覧不可とされるマンガは貸出カウンター奥のエリアに収蔵されている。子どもが簡単に手に取らないように、という配慮である。ほかの棚にも12歳以上というレーティングがされたものもあり、少年マンガの多くがこの棚に収納されていた。この判断は適宜館員が行うという。

来館者は月3万人程度。ほかの分館は2万人程度なので、多いほうだという。年間では37万人程度の利用がある。貸出量とともに、年々増加している。開館から10年以上が経過しているので、認知度が上がってきたのではという推測である。

来館者の年代層で最も多いのは30～40代で、男女比はほぼ同じくらい。やや女性のほうが多い。若年

層の貸し出し数は少なく、館に入り浸ってマンガをよんでいる者としては、40代くらいの男性が目立つ。土日には家族連れもみられ、そのときにはマンガコーナーも子どもたちでにぎわうということであった。

さて、図書館のスペース配置を見てもわかるように、この館の蔵書すべてがマンガなわけではない。中崙地区の図書館として市民サービスを行う義務があるため、蔵書約16万冊の三分の二近くは一般書籍、外国語書籍および新聞なのだ。他の市立図書館におけるマンガの割合は1%程度なので、マンガの割合が非常に高いことに間違いはないが、その量という点で専門図書館と言い切るのは微妙であろう。

むしろこの館をマンガ図書館として特徴づけているのは、1966年～1987年の台湾で発行されたマンガのコレクションを収蔵している点である。政府がマンガ出版物の検閲を行っていたことは先にも述べた。出版社は、書籍を国立編譯館に納本し、審議をうけなければならなかった。こうして集められた本が、今は図書館の2階奥、「台湾早期漫画特蔵」コーナーの鍵付き書棚に移管されており、希望すれば誰でも読むことができる。1冊しか残っていないような場合を除いて、貸し出しも可能である。

劣化の問題を回避するために、台北市立図書館本館が主体となって、現在デジタル化がすすめられてもいるとのことであったが、これらのコレクションはほかの開架書棚と同じフロアにならべられ、書棚に鍵がかかっている点が異なるに過ぎない。また、書籍は分類が十分なされているというよりは、とりあえず収蔵して並べてあるという状況である。

当時のマンガ本は紙の質がさほど良いものではなかったこともあり、劣化もすすんでいる。しかし、希望者にはいつでも閲覧が可能と判断されている。鍵などかけず、今後はどんどん開放していきたい、という話もあった。

このように、図書館側の話からは、台湾早期漫画のコレクションに対して、目的に基づき、それを整理し、管理、保存していこうという強い意志はあまり感じられなかった。むしろ、マンガ本であるからには市民に読まれなければならない。まさにそれこそが意義のある利用のされかただと、考えているようであった。

こうした(どちらかといえば)アーカイブの意思の薄さは、市立図書館において、古い年代のコレクションを充実させていくための書籍購入計画がすすめられてはいない、という点からも読み取れる。コレクターからの寄贈等を待つのみというのが現状である。

そもそも、当該図書館のマンガ本購入計画は、新刊に対して検討されるのみである。その手順は、市立図書館の本館で開かれる月一回の会議にて選定され、館の担当者が予算に従って購入する、というものである。出版されているマンガすべてを購入することは不可能なので、レーティングとの兼ね合いなどを見ながら選書していく。購入予算は図書館の面積などを考慮して決定されるが、貸出数が市図書館全体で3位であることもあり、中崙分館は比較的多いほうであるという。こうした予算の中で、台湾をはじめ、香港、中国などで出版された華人作家のものはできるだけ優先して購入しているとのことだったが、基本的には、現在出版されているマンガ本を中心に購入している。これが意味するのは、購入する書籍の大半は、市場の大半を占める日本マンガの翻訳版である、ということである。

さらにいえば、新刊本のアーカイブにも積極的ではない。たとえば、以前は新刊を各2冊購入していたが、現在では1冊ずつ。廃棄される際に代替が入手できればよいが、無理ならばあきらめるという状況らしい。

こうした選書について、市民側から特に不満が出る、ということはないようだ。あるとしても、レーティングに関する意見が多いという。図書館は、台湾の倫理委員会によるレーティングをもとにこれをおこなっている。

では、図書館はマンガ文化に対して自らの役割をどのようなものと定義しているのか。彼らはマンガコンテストやマンガ家協会に依頼して創作講座などを実施し、「マンガの質を上げる」こと、そして無料でマンガを読めるようにすることで「マンガを多くの人に知らしめる」ことを目的としているという。こうした活動を選択するのは、台湾人作家のマンガをデジタル化し、台湾においてマンガを描くことの裾野を広げたいと思っているからなのだという。

つまるところ、彼らが目指すところは、市民が求める「今」のマンガをサービスすることであり、それによっ

て図書館の認知度を上げることらしい。市民サービスを第一とする市立図書館としては当然といえば当然な目標であろう。彼らは、マンガは古かろうが新しかろうが、読みたいという読者がいてこそ収蔵に値するものとなると、とらえているようであった。

3. 国家図書館の理念と現状

では、国家図書館芸術および視聴覚資料センターはどうだろう。「国家」の名称が示す通り、こちらは国立の施設である。台北市中正區中山南路二十號に位置し、かつて劇場だった建物をリノベーションした建物は高級感を漂わせる。センターが開館したのは2008年10月。劇場の座席部分の階段を生かし、ごろ寝しながらマンガを読める「マンガ室」が館生まれたのが2010年10月である。この部屋はさして大きくはないが、木目調の階段スペースにはクッション替わりのクマのぬいぐるみが置かれ、居心地の良い空間をつくりだしている。



図2. 国家図書館マンガ室の風景

マンガの蔵書は2013年現在2万3000冊。「マンガ室」に出ているのはそのうちの1万冊。年に一度、1500冊ほどを入れ変える。18才未満購読不可の作品は閲覧にはまわさない。入れ替えは人気等を考慮して行うが、損傷の激しいものは保存に回す。来館者は隣に大学などがあるため、授業の合間にやってくる学生が少なくないという。もちろん、わざわざ訪ねてくる人もいる。(後述の利用制限の問題もあり)来館者は20代～30代が主であるという。貸本屋にいくのははばかれるとして、リタイヤした年代の人も訪れる。どちら

かといえば男性が多い。館全体では月 2000 人程度の利用者がおり、その三分の一程度がマンガ室の利用者ではないかと推測できるとのことだった。

このようにみると、国家図書館も台北市立図書館同様、マンガを読むことを推進する館に思える。確かに、図書館開館時のプレスリリースには『『マンガ室』の開館は、台湾のマンガ創意産業に対する支持の証』であるとされており、「若者らが台湾のマンガ創作」に対して認識をあらたにするよう促すことが目指されている。その目的のために、作画ソフトのはいったパソコンを設置しているし、今後も更新していきたいとのことであった。これらの点では、市立図書館と目指すところに大差がない。

だが、国家図書館全体として、その最大の責務は、アーカイブの構築にある。もちろん、この館でも最も重視される役割であるという。館の蔵書は基本的に出版社からの納本によっている。マンガも同様である。書籍の保存が優先されるため、本館および分館には 19 歳以上という入場制限が設けられている（ただし、2012 年からは、マンガを利用したいという若年層の希望を反映する形で、16 歳以上の館利用が可能となった）。貸出も行っていない。「読む」以上に集めて保存する場として国家図書館は位置付けられている。マンガ室に出されたマンガ本のうち、損傷の激しいものを保存に回すのもそのためだ。書庫にあるものも含めてデータベース検索が可能であるが、基本的にはマンガ室に開架されているもの以外は容易に閲覧できないようにしている。研究目的の閲覧希望に対して、本を提供ができるようにするためだという。

とはいえ、マンガに関するかぎり、その保存環境は完璧といい難い。マンガを収蔵する保存室は、空調管理などがされた書庫というわけではない。本棚は棚の間隔を通常より低くして、より多くのマンガ本を設置できるように工夫している。空間に限りがあるということが目下の悩みだ。

本来の館の目的を遂行するためには、古いマンガ本を買い集める必要もあるだろうし、保存書庫の管理も必要なはずであろう。しかし先にも述べたように、施設の蔵書は基本的に納本によるので、書籍購入予算自体は限られている。さらに、選書は国家図書館全体で

決定され、マンガは芸術関連書籍の一部として購入が検討されるにすぎない。その多くは、海外コミックス購入に充てられており、過去の作品を扱うには至っていない。

また、アーカイブを旨とする国家図書館にこそ、市立図書館におかれた「台湾早期漫画特蔵」が寄贈されるべきではなかったのかという疑問もわく。これに関しては、1990 年代当時、マンガは子どものものだという考えが根強かったため、国家図書館は書庫がありながらもその収蔵を見送ったのだという話を聞いた。今となつては、台北市立図書館にとっても、マンガの専門性を示すアイコンとなったこのコレクションを手放す理由はないのでは、ということである。その結果、アーカイブを責務とする場所に、過去のマンガが収蔵されていないという状況が生まれている。このエピソードは、台湾におけるマンガ文化が、ここ数年になって急速に見直されてきたものであることを物語っている。

もう一つ、台湾におけるマンガの社会的位置づけを感じさせる次のような話も聞いた。そもそもマンガ室が開館したのは、国家図書館における芸術書分類の中にマンガが占める割合が多すぎたため、ほかのコーナーを圧迫してしまう危険性があったからだという。マンガのアーカイブを作る上で常に浮上する「量」の問題が、マンガ室開館のきっかけとなっていた。マンガは「隔離」されるべきものとみなされたがゆえに、当初の構想が浮上したのであった。

とはいえ、担当者によると、こうしたマンガの「隔離」が行われたのは、量が膨大であり、マンガが子ども向けのものにとらえられているため、主に図書館内部の有識者からのマンガ収蔵それ自体に対する批判的視点などがあったことがその第一の理由ではあったが、結果的には、マンガをまとめて収蔵することによって、国家が集める「文化」としてのマンガイメージを打ち出すよい機会になった、ということであった。つまり、「隔離」によって、国家の施設にアーカイブ（らしきもの）が生まれ、それが、台湾において、マンガが収集するに足るものであるというお墨付きを与える行為として、社会的に理解されたということになる。

台湾の現状では、マンガ本が国家にとって何らかの有効な資源、系統立てて集めることに意義がある「貴

重」な何かととらえられるからこそ収集する、というよりは、(意図せずして)図書館に集まってしまったことによって、図書館の権威がマンガ文化の位相を変化させた、というベクトルのほうが強くはたらいっている。

4. 集めることの公共性をめぐって

以上のように、図書館の機能としては、台北市立図書館と国家図書館はサービスとアーカイブという役割を分担しているのだが、マンガに関するかぎり、そこにはねじれが生じている。古い資料を収蔵しているのは「サービス」として本を集める台北市立図書館であり、アーカイブを旨とする機関には、現在出版される書籍が集まるのである。

また、両館はともに「台湾マンガを育てたい。人々にマンガ文化に触れてほしい」と望んでいる。しかし、二つの図書館が今買い集めたり、納本を受けたりしているマンガ本は、台湾のマンガ市場の現在を反映し、日本マンガの翻訳版がその大半を占めている。彼らがいう、人々に触れてほしいマンガ、という時の「マンガ」の国籍は曖昧だ。台湾のマンガ文化において、描くことと、出版され読むことの現場は必ずしも一国内で完結するものではない。ここで提示されるのは、マンガ文化をアーカイブしていく、というときのその範囲は、マンガが「描かれる」ときに生まれる文化を中心に考えるべきなのか、ある場所で「読まれる」ことを重視し、そこでの意味の生産をふくめてとらえるべきなのか、という問題である。

台湾の二つの図書館には「低俗なマンガ」という世間の評価に新たな視点を提供するきっかけとなった、という自負がある。図書館という施設がもつ権威が、台湾のマンガ文化に十分なインパクトを与えたのは確かだ。そして、館が作り出し、来館者に提供しようとするマンガ文化は、今、楽しむために読むもの、流れ去ってゆくものとしてマンガをとらえようとするものである。言い換えれば、生産したのが誰か、ということからマンガの価値を確定するのではなく、だれがマンガを読むのか、という観点からその意味を見出そうとしている。

しかし、ここで提示される「読むこと」を中心とするマンガ文化は、消費的な「読み」の提供にとどまってい

るように思われる。今はまだ、図書館が、マンガ表現の源流を探ったり、それらを批判しつつ現在地を理解し、自分たちがどのような「読み方」をしているのかを考えたりする場を作り出すということにまでは至っていない。

台湾の社会が、日本マンガの翻訳版をアーカイブしながら、そこに何らかの意味を見出すとしたら、それは国家の枠組みを超えた、公共性をもた、提示することになるのかもしれない。

本研究は JSPS 科研費・若手研究 (B)「『記憶の場』の観光地化とポピュラー文化が生み出す歴史意識の変容に関する実証的研究」(研究課題番号: 24730447 代表・山中千恵)の成果の一部である。

参考・引用文献

- 李衣雲 2002 台湾漫画が文化の場に占める位置の転換:ブルデューの視点から。東京大学社会情報研究所紀要, 62 巻, 191 頁-216 頁。
- 李衣雲 2005 実像と虚像の衝突:戦後台湾における日本イメージ再上昇の意味 1945-1949。情報学研究:学環:東京大学大学院情報学環紀要, 69 巻, 137 頁-159 頁。
- 李衣雲 2007 台湾における「日本」イメージの変化:1945-2003「哈日現象」の展開について。日本東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻, 博士論文(社会情報学)。
- トゥ・ミンフン 2012 台湾における日本のマンガジェンダーと他者。東アジアの若者はいま日本のマンガ文化を中心に。アジア女性交流研究フォーラム。
- 山中千恵 2013 ポピュラー文化から見る 石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編 ポピュラー文化ミュージアム ミネルパ書房, 31 頁-48 頁。
- 山中千恵・谷川竜一・伊藤遊・村田麻里子 2013 日本のマンガミュージアム:あらたな文化共有と地域社会。京都大学地域研究総合センター。